

1980年代アメリカの神話的家族観再考

—マドンナの“Papa, Don't Preach”を手掛かりに

増田和香子

はじめに

アメリカの歌手であるマドンナは、デビュー以来様々な社会問題を提起してきた。彼女がデビューした1982年は新保守主義の時代と言われている。この頃ロナルド・レーガンが第40代大統領に就任し、彼の政策は保守傾倒であった。特に妊娠中絶問題に関しては絶対反対の立場を貫いた。このような時代背景の中、「女性」であり「リベラル」な姿勢を前面に出したマドンナが登場し人気を博したことは、アメリカ文化に大きな影響をもたらしたと考えられる。デビュー当時はベティ・フリーダンを始めとしたフェミニスト達から「60年代から培ってきた女性解放運動を後退させた愚かな女」と厳しく批判されたが、マドンナの改革的、開放的な言動が一貫して続くと、一転して「マドンナこそ女性解放運動の真の理解者である」と絶大な支持を受けることになる。商業面においても1984年に出した3枚目のCD、*Like a Virgin*以降常にビルボードチャートに入っており、歌手として不動の地位を築いた。つまり、時代が保守化していたにも関わらずリベラルな立場を取る女性歌手が一般大衆から支持されたのである。時代が向かう保守の波に逆らうかのように、女性解放運動はまだまだ冷めやらず、マドンナは一躍女性にとって自由を示すアイコンとなった。本論文では、マドンナの3枚目のオリジナルアルバムからシングルカットされた“Papa, Don't Preach”を資料とし、新保守時代にマドンナが投げかけた妊娠中絶問題の影響力、そしてミュージックビデオで明らかとなる家父長制への

抵抗を論じていく。そこにはマドンナの父親がイタリア系移民一世であることも大きく影響を及ぼしている。

1. 楽曲に対する反応

“Papa, Don’t Preach” (1986年)は歌詞およびミュージックビデオでロマンティックな愛や父権制に疑問を呈しているだけではなく、アメリカが抱える妊娠中絶の是非も問うている。そしてアメリカの伝統的な家族観にもマドンナは疑問を投じている。これは、アメリカにおける「幸せな家族」とは両親ともに揃っていることとする神話的価値観への挑戦でもある。女性史と映画理論研究者であるアン・カプランは、マドンナはポストモダン時代の女性のイメージをまとめ上げ、繋ぎ、そして新たな女性像の一片を生んだと以下のように評している。

（“Papa, Don’t Preach”の）主人公は自分に決定権があり、自己主張ができる十代の少女である。彼女は恋に落ち、その結果妊娠をした。そして子供を産みたいと願っている。〈中略〉このビデオはポストフェミニストの立場から見ると、まさに「処女」と「売春婦」の境界線を見えにくくするものである、なぜならば、主人公は処女性を見せているでもなく、当然売春婦でもない。年頃にしては多少大人びた十代の少女が恋をして子供を宿した。そして社会規範に従うことを拒み、子供を産み育てることを望んでいるビデオである。社会規範と彼女の望みの双方からの矛盾の解決点は、少女の父親の存在と許しにある。しかし唯一の家族である父親は墮胎を求め、主人公は自分自身の主張を強くする。マドンナはフェミニストであり、強い主張を持ち、セクシーでありつつも純粋さは失っていない。女性解放運動後に生まれた若い女性たちに、女性の強さと純真さを併せ持つ姿を示している。¹

確かに楽曲は明らかに十代の妊娠と中絶問題を扱っている。メディアが若者に与える影響をコミュニケーション学の立場から研究しているジェーン・ブラウンとローリエ・シュルツは、このビデオが社会に及ぼした影響を報告している。彼女たちの調査によると、1986年のリリース後、保守的

または伝統的家族観を主張する団体である家族計画連盟ニューヨーク支部 (Planned Parenthood Affiliate in New York City) はこの楽曲にはセックスや妊娠、出産に対する楽観的なとらえ方を十代に伝えていると非難した。さらにこの会の代表であるアルフレッド・モーランは「若者がこの曲に触れた場合の危険性を十分考慮して欲しい」という強い主張のメモをメディア媒体に向けて送っている。² そのメモでは、「(“Papa, Don’t Preach”) は妊娠することはかっこいいことであり、子供を持つことは正しいこと、良いことと考えている。親や学校が言う『何か別のやり方がある』という反対意見には『一切耳を傾けるな、お説教はやめて』とマドンナは言っているが、現実には、十代で親となる多くの若者たちは永久に貧困に苦しむ状況から浮かび上がれない³」と、具体的な批判をしている。これを受けたメディア側の反応は、「この楽曲を繰り返しラジオやテレビで放映することは、十代の性行為を助長し、妊娠はとにかく素晴らしいことであり、リスクも危険もない」ことを助長しているとの見解を示し、この楽曲に対する危機感を表明した。さらに家族計画連盟ニューヨーク支部はマドンナの所属レコード会社ワーナー・ブラザーズに対して、この曲の印税の25%を十代向けの性教育プログラムに寄付するよう促した。全米女性連盟 (the National Organization for Women) や、その他の女性の権利獲得を目指す団体ですら、マドンナへ批判の声をあげている。

しかし一方では、中絶に反対する保守グループの間からマドンナ側につく者もいた。第45代アメリカ合衆国副大統領アル・ゴアの妻ティッパー・ゴアは、当時の財務長官ジェームズ・ベイカーの妻であったスーザン・ベイカーと共にペアレンツ・ミュージック・リソース・センターを設立した。二人はこの作品に以下のような賞賛を送っている。「この曲は女性にとって差し迫った繊細な問題を、マドンナ自信の解釈で我々に伝えている。そしてこの重要な問題についてより一層のサポートが必要であり、妊娠中絶に関しては家族の中でもっと議論されるべき事柄である。この作品は議論を進めるものであり、私は作品に対して賞賛を送る」。⁴ また、プロライフ (中

絶反対)側の代表者であるスーザン・カーペンター・マクミリアンですら、「若者にとって、もはや中絶は街中のどこでも受けられるようになってい

る。マドンナが言いたいのは『代替案だってある』ということだ⁵」との見解を示している。こうしたマドンナ擁護の意見は、彼女の楽曲を発端として公の場で妊娠中絶という従来は私的な領域とされてきた道徳的な問題が広く議論されたこと、そして容易に決着がつく問題ではないことを示している。つまり、マドンナはまずこの楽曲を世に出すことで、妊娠中絶の是非を世に問うことに成功したと言えるだろう。マドンナは過去多くの社会論争を招いているが、公式に見解を発表したことはない。しかし、この論争に関しては広報を通じて「この曲は十代の妊娠と中絶を単に美化し、賞賛しているわけではない。何らかの立場を主張するのではなく、私の意図するところは、この曲を通じて世間にもっと考えて欲しかった。人は自由に物事を選択できる立場にあるということだ⁶」と発表した。このことから、「Papa, Don't Preach」がいかに広く議論の対象となったかがわかる。

2. 歌詞分析

1980年代は新保守主義の時代とされ、ロナルド・レーガンは反中絶派の立場を取った。しかし、歴史家のヘインズ・ジョンソンは、ギャラップ世論調査が大統領選挙結果を根拠に、アメリカ国民と大統領は、鍵となった2つのキャンペーンである男女平等憲法修正条項(ERA)および中絶法案に大きな相互同意を得られていなかったことを示した。まず、レーガンはERAに反対を唱えていたが、50州のうち35州は賛同を示していた。そして妊娠中絶法案に関しては、レーガンは母体に害が及ぶ場合のみ中絶を認める発言をしていたが、国民の多くはすべての場合の中絶に寛容な姿勢を示していた。⁷マドンナはこうした一般大衆の潮流をうまく読みとり、歌詞とミュージックビデオにすくい上げたと言えるだろう。

ここからは、まず歌詞に注目してマドンナの妊娠中絶に対するメッセージを分析していく。

パパ きっと怒るだろうなってわかってる
 私はいつでもパパの小さな女の子だったから
 でももう分かってくれてもいいでしょ？
 私は赤ちゃんじゃない
 いつも正しいことと
 間違ってることを教えてくれた
 パパの助けが必要な
 お願い 気を強く持って
 まだ心は未熟かもしれないけど
 自分の言おうとしてることはわかってる
 パパが警告してたこと
 パパが言ったこと
 一人で大丈夫、できるって思った
 でも私達すごく混乱してる
 それに私はそうしたいとは思ってない
 (増田訳)

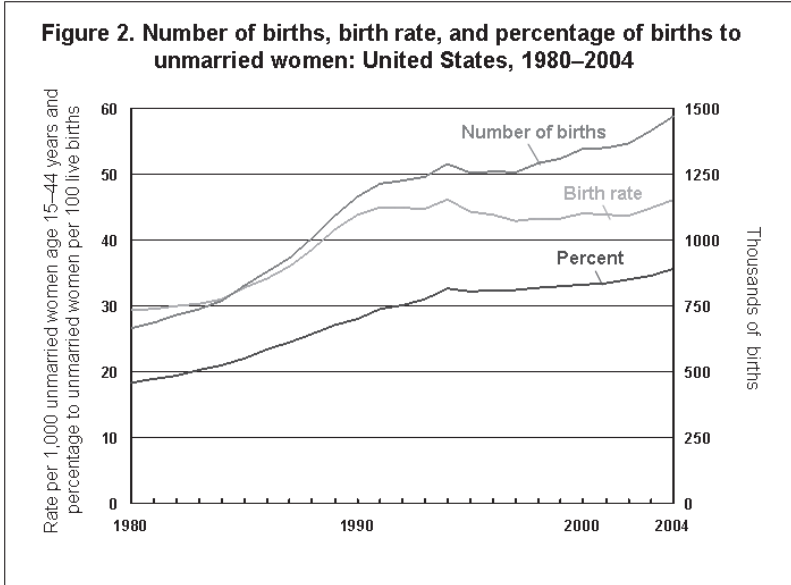
この節からは、父親が娘をいつまでも子供のように思い、自立はまだ先だと考えている状態がわかる。しかし、主人公は親に反発するかの如く、父親から自立したいと考えており、子供扱いされることを快く思っていない。しかし、善悪を教えてくれた父親に対して助けを求めなくてはならないような切迫した状況であることもわかる。この一節から、少女の自立心と親への反発心という相反する二つの感情が読み取れる。ここまでの歌詞におけるひとつの鍵は、母親の不在だろう。父親のみが主人公を育てたと推測できる歌詞でもあり、また単純化された家父長制を示していると指摘できる歌詞である。そしてここから、主人公は自分の主張を強い調子で歌っていく。

パパ 説教をしないで
 本当に困ってるの
 パパ 説教しないで
 眠れないの

でも心を決めた
 赤ちゃんは手放さない
 赤ちゃんは手放さないわ
 彼は私と結婚したいと言ってる
 ちっちゃい家庭を築いていくのよ
 たぶんやっていけるわ
 ほんの少し何かを犠牲にすれば
 (増田訳)

この節でようやく主人公が妊娠しており、中絶を勧められていることがわかる。しかし少女は出産を強く希望している。相手の男性と結婚し、「ちっちゃい家庭 (a little family)」を築き、そこには「犠牲 (sacrifice)」が存在することも承知している。この小さな家庭は、アメリカが理想とする家族像とは遠い。アメリカの神話的価値観や美徳、信念に関して論文を発表しているジャック・ナッシュバーによると、「アメリカで最も望ましい家族単位は、父親、母親、二人～三人の子供、そしてペットで構成される。両親はロマンティックな愛のもとに婚姻関係を結ぶべきであり、離婚は失敗とみなされる。」⁸結婚前の妊娠と小さな家族という価値観は、アメリカの「ロマンティックな愛」という神話に反している。容認される「正しい愛」とは、婚姻関係が大前提となっているからだ。しかし、楽曲で描かれている父娘関係には母親が登場しない。既に望まれるべき理想像は崩れているのだ。実際、マドンナ自身も幼い頃に母親を亡くし、父親に育てられてきた。彼女にとって父一人娘一人⁹という家族単位はなんら不自然なものではなく、むしろ理想とされないことに違和感を覚えただろう。そして1980年代半ばのアメリカ社会において、ひとり親の家庭は驚くべきことではない。ジョンソンによると、家族構成は多様化しており、統計上は少なくとも近年のカップルはふた組みにひと組の離婚を示しており、この数値は世界でも最も高い位置にある。またアメリカの離婚率は1980年以降上昇傾向にある。¹⁰(表1)このようにごく一般的な状況に置かれている主人公

表1 1980年から2004年までの未婚女性の出産率等



出所 Centers for Disease Control and Prevention

<http://www.cdc.gov/nchs/data/hestat/prelim_births/prelim_births04.htm> (2016年1月21日アクセス)。

は、相手の男性と結婚をし子供を産むことでアメリカの神話的家族を体現する役割を背負わされたことがわかる。この節からは、マドンナが従来の理想的家族像に疑問を投げかけていることが読み取れる。

でも友達をあきらめなさい
 ってずっと言ってる
 生活していくのには
 私が若すぎるんだって
 今私がほしいのは
 あなたのアドバイスなの お願い
 パパ 説教をしないで

本当に困ってるの
パパ説教しないで
眠れないの
でも心を決めた
赤ちゃんは手放さない
赤ちゃんは手放さないわ
(増田訳)

前節によると、相手の男性も結婚を望み、二人の関係は良好と想像できる。しかし、一方ではいまだに少女は父親の存在を気にかけ、父親の許しと助けを懇願している。結婚という当人同士の同意の前に、父親という壁が立ちはだかっていることがわかる。この大きな壁については次の節からも主人公の葛藤が伺える。

お父さん、ねえお父さん
彼がどれだけ私に優しくしてくれるか見てみれば
きっと私達を祝福してくれる
私達は愛し合っているから
だからお願い
パパお説教をしないで
本当に困ってるの
パパお説教をしないで
眠れないの
でも心を決めた
赤ちゃんは産みます
赤ちゃんは産みます
赤ちゃんを産む
でも 私を愛するのをやめないでね パパ
分かっている
私は赤ちゃんを産む
(増田訳)

最終的にこの歌詞は子供を産むと宣言して終わっている。しかし、その根幹には父親の許しと助けを懇願する感情が存在し、少女の自立については弱々しさが感じられる。また、父親だけではなく結婚相手の男性に対しても、結婚さえすれば幸せな家庭が築けると考えている姿勢が感じられる。

1980年代において妊娠中絶は大きな社会問題であった。プロライフ側は楽曲とマドンナを非難し、マドンナ自信も「最初にこの曲を歌ったとき、馬鹿げた曲だと思った。私が若い女の子たちに『外に出て妊娠すべきよ』と歌っているような気がした」と述べている。しかし、「でも、すぐに考え直したの。この曲は女の子が一番大事な決断を自分で下す歌だっていうことに。この曲の主人公は父親と緊密な関係を保っていて、それを保ち続けたいと考えている。それは私の人生への賛美でもあるから。父を愛している、相手も愛している、お腹の子供ももちろん愛している。もちろん結末は誰にもわからない。けれど少なくとも始まりとしてはとってもポジティブなものよ」¹¹と、この楽曲は思春期の少女の自立とアメリカの伝統的価値観を超えた家族への愛情を歌ったものだと言っている。

3. ミュージックビデオから読み取る家父長制

歌詞からは主人公の父親との関係、家父長制に対する葛藤と、「ちっちゃな家庭」を持つ不安感と期待、そして父親への愛情を読み取った。ここからはミュージックビデオが主に描く父娘関係と父権制、そしてイタリア系移民というエスニシティにも言及したい。主な登場人物は、少女、恋人、父親、そして「パパ、お説教はやめて」と始まる歌詞の部分で登場する黒いレオタード姿のダンサーの4人である。このダンサーは黒をまとうことでビデオの物語調の世界観と一線を画しており、ナレーターの役割も担っている。(図1)少女とダンサーはどちらもマドンナが演じているが、同一人物として描かれていない。しかし、視聴者にとってはマドンナが両者を演じていることは一目瞭然である。MTVにおける女性歌手のイメージと社会への影響を研究しているリサ・A・ルイスは、「ナレーターの視点と少



図1 “Papa, Don’t Preach”

女の視点を分けることは、二つの相反するキャラクターを示す上で効果的である。一方の(黒いレオタード風衣装の)人物が存在することで、思春期の少女の存在、とりわけ彼女の人生に視点が向く。彼女は学生であり、社会の倫理、学校での振舞い方、宗教、青春に縛られている。しかし、実際は、彼女は魅力ある女性で、男性を引きつけ、子どもを宿することができる」¹²と、論じている。

さらに、ビデオの中では主人公の少女は労働者階級とイタリア系移民というイメージを用いている。少女は横しまのTシャツ、青いジーンズ、バレエシューズという非常にシンプルな衣裳を着ている。髪型は短く切られていて、少年風である。化粧も薄く、着飾った様子はない。また、ビデオの冒頭ではニューヨーク港と自由の女神の姿が挿入されており、移民のイメージと自由への憧れを感じさせられる。ルイスはこのシーンを「男性と女性の性的な遭遇を象徴している」と分析する。最後に指摘すべき箇所は、



図2 “Papa, Don't Preach”

少女が着ているTシャツに、“Italian's Do It Better”とロゴが入っている点である。(図2)ルイスはこのロゴについて以下のように指摘している。「複雑で矛盾したこのロゴは、彼女の(アメリカ社会が抱える)イデオロギーへの抵抗を示している。労働者階級である自負と、民族性の継承、そしてアメリカ社会で(移民が)経済格差に苦しむ現状とプロテスタント流の道徳的価値観¹³への抵抗を示している」。¹⁴このように、ロゴの示す意味は少女のアメリカ社会への抵抗と受け取る分析もあるが、別の意味を持つメッセージとも考えられるのではないだろうか。つまり、イタリア系である「私(マドンナ)」は家族に対する道徳的価値観や神話を新しい概念に捉え直すことが可能というメッセージである。ビデオの中でマドンナ演じる少女は交際相手との愛情を育み、結果として妊娠してしまったことを描いている。今までのマドンナのミュージックビデオは、例えば*Like a Virgin*ではベネチアのゴンドラに乗ったマドンナがセクシーに踊る姿が撮られていたり、



図3 “Papa, Don't Preach”

“Like a Prayer”では黒人聖像を誘惑するといったような、性的にもメッセージ性においても過激な作品が多かった。しかし今回の作品は今までにない「純粹さ」がテーマの一つになっている。とは言え、単に十代の無垢な少女の葛藤を描くだけでは終わらせず、そこに80年代の時代背景を巧妙に取り入れている。歌詞では表現できなかったアメリカの伝統的家族観に、視覚を利用することで疑問を投げかけた。歌詞には少女の属する社会階級や出自、家庭環境はまったく言及されていないが、映像では明確に示すことが可能である。また、父娘関係も映像ではより明確に表現されている。歌詞では少女は単に父親の許しが欲しいと歌うに過ぎないが、映像では最後のシーンが最も象徴的となっている。少女が妊娠を父親に告げ、部屋で許しを待っている。ドアが開き父親が入ってくると、座っている少女に対して手を差し伸べる。(図3) 父親が立ち、少女が座っているこのショットは二人の力関係を構図を用いて示しているとも考えられる。この力関係は、

歌詞の中では結論が歌われていない。しかし、映像では明確な許しを描いている。そしてマドンナは「もちろん結末は誰にもわからない。けれども少なくとも始まりとしてはとってもポジティブなものよ」とインタビューで答えている。父娘関係は、父の許しを得ることでようやく「喜ばしい始まり」を迎えたのである。

この父娘関係はマドンナの生い立ちに結びつけて捉えることが可能だろう。マドンナの実母は彼女が5歳のときに乳がんで亡くなっている。その後義母を迎えたが、あまりなつくことができなかつたと後に語っている。マドンナは社会に対する自身のメッセージ性をジェンダーやポストモダン理論の視点から論じられることが多い。しかし、ショーン・アルバイツは彼女がイタリア系移民の子供であるという点からエスニシティの視点を用いて論じている。「エスニシティやジェンダー、セクシュアリティを通じてマドンナを探求する旅は、アメリカ人として生きるアイデンティティや、まだ知られていないエスニック・アイデンティティを知るきっかけになる」¹⁵ マドンナのエスニック・アイデンティティは、Madonna Louise Veronica Ciccone という名前が表している。父親がイタリア系移民一世であり、実母はフランス系カナダ人だった。彼女はイタリア系移民の父を持っていることを非常に重要視しており、しばしば「私にはイタリア系移民である父の才能が備わっている」と発言している。前述したように父の Tony Ciccone はマドンナが8歳のときに家政婦だった女性と再婚を考えたが、マドンナにとって「彼女(義母)を『母親』という敬うべき存在と考えることは難しかったし、父の人生の中で新たな『最高の存在』と認めることは難しかった」と自身で述懐している。実母を亡くしたときからマドンナは父との強い絆、そして「母」の存在に疑問を感じていたことがわかる。こうした実体験が“Papa, Don't Preach”のメッセージに密接に関係していると分析できる。

映像の中に母親は一切登場しない。5~6歳と思われる少女が父の料理の手伝いをしたり、庭で父親に遊んでもらっている姿が出てくる。そして十

代になると、今度は自分が料理をし、父親がその手伝いをしている。こうした光景がマドンナ自身にあったかは不明だが、自身の過去を幾分か投影していると考えすることは不可能ではないだろう。そして今度は自分が子供を産むことで、その光景に母親を登場させることができる。自分の子供時代には作ることができなかった「アメリカ的家族観」に一步近づくことができた。イタリア系移民の子供である自分も、小さくはあるが家族を形成することで、理想とされる家族像に近づくことができる。“Italian’s Do It Better”にはこうしたマドンナの憧れが投影されているのではないだろうか。

しかし一方では、あくまで恋人と結婚することが大前提となっているため、これは今までは父娘という父権制に従っていたが、今度は父親の存在が配偶者の男性に変わっただけで、結局少女は家父長制という枠組みから脱せていないことも明らかである。たとえ子供を一人で産むことができて、そこには父親の許しを必要としており、「ちっちゃな家族」形成には配偶者を必要としていることも指摘できるだろう。

おわりに

発表当初は“Papa, Don’t Preach”は十代の妊娠中絶是非を巡る議論の対象という流れの中で論じられていた。マドンナ自身はプロライフ側ともプロチョイス（中絶賛成）側ともコメントは発表していない。しかし、歌詞を見る限りはプロライフと捉えることができるだろう。この楽曲はロマンティックな愛と、その結果授かった子供と若者はどのように向き合うべきか、という問いを投げかけている。しかし、映像では十代の妊娠中絶議論から少し離れて、アメリカの神話的家族観、そして家父長制をテーマにしていることがわかる。両親の揃った従来の家族像という概念がアメリカではすでに崩壊しており歓迎されないとしても、現実として離婚率は増加し、ひとり親家庭は増加を辿っている。マドンナはこのようなアメリカの現実を作品に巧みに取り入れることに成功したのである。

注

- 1 Ann E. Kaplan, *Rocking around the Clock* (New York: Routledge, 1987), 130–2.
- 2 Jane D. Brown and Laurie Schulze, “The Effects of Race, Gender, and Fandom on Audience Interpretations of Madonna’s Music Video,” *Journal of Communication* 40.2, 1990, 91.
- 3 Christopher Anderson, *Madonna, Unauthorized* (London: Signet, 1992), 221.
- 4 Mick St. Michael, *Madonna Talking* (London: Omnibus Press, 2004), 221.
- 5 Christopher Anderson, *Madonna, Unauthorized* (London: Signet, 1992), 221.
- 6 Ibid. 221.
- 7 Haynes Johnson, *Sleepwalking through History: America in the Reagan Years* (New York: W. W. Norton, 1991), 158.
- 8 Jack Nachbar and Kevin Lause, “Introduction Songs of the Unseen Road: Myths, Beliefs, and Values in Popular Culture”, *Popular Culture an Introduction* (Bowling Green: Bowling Green UP, 1992), 82–109.
- 9 マドンナには8人の兄妹がいる。
- 10 Haynes Johnson, *Sleepwalking through History: America in the Reagan Years* (New York: W. W. Norton, 1991), 451.
- 11 Jane D. Brown and Laurie Schulze, “The Effects of Race, Gender, and Fandom on Audience Interpretations of Madonna’s Music Video,” *Journal of Communication* 40.2, 1990, 92.
- 12 Lisa A. Lewis, *Gender Politics and MTV: Voicing the Difference* (Philadelphia: Temple UP, 1990), 138.
- 13 “Papa, Don’t Preach”のPapaはローマ法王を示すとも考えられる。マドンナのカソリック的な視点については今後の研究課題としたい。
- 14 Lisa A. Lewis, *Gender Politics and MTV: Voicing the Difference* (Philadelphia: Temple UP, 1990), 138.
- 15 Sean Albeiz, “The Day the Music Died Laughing: Madonna and Country”, *Madonna’s Drowned Worlds: New Approaches to Her Cultural Transformations, 1983–2003* (Vermont: Ashgate, 2004), 120.